

「日本」を論ずることはどこにつながつているのか

——「内部」の自明化と「普遍」的なもの——

栗原文和

一 現状分析

表現および思考に関わる制度をここではジャーナリズム・アカデミズム・教育と区分けしてみよう。もちろん、この区分けは粗雑なものであり、このような区分からはみでるもの、これらの区分に重なり合っているようなものも当然ある。さらに、この区分を行うために引かれた境界線自体が表現や思考を制限する制度であるという批判も可能である。

ただ、あえてこの区分から始めようとするのは、この区分に実体があるかどうかは別としてそれが様々な場面で実際に機能してしまっているからであり、また、これらの制度がそれぞれの領域を守りつつお互いを批判しあうことでそれぞれの位置を根拠づけるといふ関係にあるからである。そしてこれらの制度は、共通の価値・本質を自明の前提としてお互いを根拠づけつつ機能し、また根拠づけ

つ機能することで共通の価値・本質の自明性を再生産し続けている。

もう少し具体的に考えるために狭義の文学を例にしよう。ジャーナリズムに属する出版社からある作家が書いた小説が出版される。まず、その小説と小説家は出版される過程で出版社や編集者によって評価されていることになるが、さらにジャーナリズムの中で評論家や他の作家に批評され一定の価値を与えられる。そして、その小説と作家に関する評価・価値づけはジャーナリズムにとどまるものではない。大学の文学の研究者が論文の中で取り上げ、文学史的に位置づけるといふことがあるし、また教科書に収める教材として採用され、小中高の国語の授業で扱われる中で教師によって一定の読み・価値が与えられることもある（大学の研究者や小中高の教員がジャーナリズムの中で批評を行ったり教科書の編集に大学の研究者が関わっていることも多いので、以上の記述はかなり単純化したものなのだが）。

このように区分別にその中で作家や小説を扱うだけではなく、他の区分をお互いに批判しあうこともある。たとえば批評家や作家、それに研究者は国語教育の制度性を批判する。たとえば国語の教師、それに批評家や作家はアカデミズムにおける研究が現場から遊離したものであることを批判する。たとえば研究者、それに国語の教師はジャーナリズムが商業主義になっていることを批判する。しかし、これらの批判はどれも自らの存在意義・批評性を社会の中で示すことと、批判の中で自明の前提になっているもの（それは各区分の存在意義ともかかわる）を追認していることにしかならない。自明の前提になっているものとはまず「文学」「小説」「作家」であり、さらには「出版」「研究」「教育」であり、細かく見れば「批評」「文学史」「国語」である。これらの本質的と見なされている価値は、実際には特に根拠もないのに、それにかかわっている人間の価値までも保証してしまっている。

このような現状は「文学」にかかわる領域だけに限ったことではなく、あらゆるジャンルに関して（ジャンルごとにくらかの各区分間の関係の違いはあるにせよ）見られることである。しかし、現在多くの場所・ジャンルで見られるようになってきているからといって、こういう状況が常に存在したというわけではない。ある過去の時点で現状のような状態が作り出されたわけであり、本論は日本でそれが起こった時として一八八〇年代という時期を取り上げることにする。

もちろん、ジャーナリズム・アカデミズム・教育といった区分が現状につながるような形で確立したのはずっと後の時期であるし、

またそれぞれの区分が同時に確立したわけでもない。一八八〇年代にはそれらはまだ明らかに区分されてすらいなかっただろう。しかし、本論では現在と同じ状況そのものが確立した時期を見出すことを目的としてはいない。注目しようとしているのは、それぞれの区分・ジャンルで現在前提となっている実現すべき（だと見なされている）理想が設定された時である。現在、ジャーナリズム・アカデミズム・教育は、ある理想（たとえば「真実」「真理」「個人」など）を実現することを目指すものとして存在していることになっているし、また、それぞれの区分自体もいつかは十全な形を得て理想の姿を取ることが期待されている。このようないつか実現すべき理想・普遍的な価値というものを前提として表現や思考が行われるようになった状況を問題にしたいのである。

それでは、一八八〇年代という時期はそれ以前の時期とどのように違っているのだろうか。

二 「内部」の自明化

一八八〇年代を扱うにあたって、まずこの時期に表現・思考に関する活動を始めた陸羯南（一八五七～一九〇七）を例に取ってみよう。陸羯南は「近時政論考」の中で、明治という新しい元号が採用されて以降の時期の「政論」の推移を回顧・整理しているが、その中で近代「第一期」を「道理を講明して人心を教化する所の学者」が「政論」を担っていた時代ととらえている。この「学者」のうち「国富論派」の代表として福沢諭吉（一八三四～一九〇一）の名前

をあげ、その影響力の大きさを「吾輩は今日より回想するに、福沢諭吉氏は一方の巨擘にして国富論派を代表したるや疑ふべからず。同氏は元と政治論者にあらず、重にも社交上に向つて改革を主張したり。然れども社交的改革の必要よりして自然政治上に論究するは免るべからず。有名なる其の著書「西洋事情」の如きは間接に新政治論を惹起したるや明かなり」と語っている。

福沢諭吉やもう一方の「国権論派」として名前があがっている加藤弘之（一八三六―一九一六）・箕作麟祥（一八四六―一八九七）・津田真道（一八二九―一九〇三）などのいわゆる啓蒙家たちの言説は、陸羯南だけではなく、一八八〇年代に表現や思考にかかわる活動を始めた近代初期のジャーナリスト・官僚・研究者たちにも「西洋」の価値観を「普遍」的な価値観として身につけさせるのに大きな役割を果たした。近代以前の言説では前提になつていなかったものが、自明の前提として彼らの言説を支えることになる。ただ、「啓蒙」した者たちと「啓蒙」された者たちは全く同じ位置に身を置いているわけではない。

福沢諭吉の「西洋事情」は、「西洋」の有形無形の諸制度を紹介することで、十九世紀後半の日本において新たにどのようなものを作り確立していかなければならないのか、ということを示したものである。「西洋事情」の「初編巻之一」では「政治」「収税法」「国債」といった政治・経済の制度に始まり、「学校」「新聞紙」「博物館」などの教育・ジャーナリズム・アカデミズムに関係する制度が今後日本にも導入されていくべきものとして紹介されている。それらのうち「新聞紙」について述べた箇所末尾にある「新聞紙の説

は、其国に由り其人の意見に従て偏頗なきにしもあらざれども、元と官許を受け出版するものにて、其議論公平を趣旨とし、国の政事を是非し人物を褒貶すること妨なし。故に世人皆之を重んじ、其大議論に由ては一時人心を傾け、政府の評議も之が為め変革することあり。譬へば此国にて師を起し彼国を攻めんとの評議あるとき、彼国の人、理非曲直を弁論し、之を新聞紙に載て世上に布告すれば、師を止るの一助ともなるべし」という記述は、陸羯南が新聞『日本』を創刊するにあたって書いた次のような文章の前提になっている。

新聞紙たるものは政権を争ふの機関にあらざれば則ち私利を射るの商品たり。機関を以て自ら任ずるものは党議に偏するの謗を免れ難く、商品を以て自ら居るものは或は流俗を趁ふの嘲を招く。今の世に当り新聞紙たるものゝ位置亦た困難ならずや。（略）我が「日本」は固より現今の政党に關係あるにあらず。然れども亦た商品を以て自ら甘ずるものにもあらず。吾輩の採る所既に一定の義あり。「日本」の趣旨を特に掲出して初刊の緒言に代ふ。（略）

「日本」は批評諷刺の方法に依り常に善悪邪正の分を明かにせんことを勉むべし。蓋し今日百般改良の実を挙げんには政治法律の力よりも寧ろ社会の公德を啓発するに如くものなしと信ずればなり。要するに「日本」は内外に向て共に信義を旨とし我が「君子国」の称を回復發揚するに外ならず。

ここでは、それまでに発行されていたいわゆる大新聞・小新聞と『日本』を差別化し、また「新聞紙」の存在する意義を語り、『日

本』が「新聞紙」のあるべき姿に近いことを語っている。引用した個所のうち、例えば「批評諷刺の方法に依り常に善悪邪正の分を明かにせんことを勉むべし」という記述は、「西洋事情」の「国の政事を是非し人物を褒貶する」「理非曲直を弁論し」といった記述を受けたものと見ることが出来る。福沢諭吉が紹介した「新聞紙」を日本において実現するべく『日本』は創刊されたわけであるが、この紹介と実現の間には大きなずれがある。

この引用の末尾にある「内外」という言葉は、他の個所では「日本」は外部に向けて国民精神を発揚すると同時に、内部に向けては「国民団結」の鞏固を勉むべし」というように開いて使われている。言い換えると、「外部」すなわちこの時代に外として意識されている「西洋」に向かって「国民精神」の存在やその特性を表明し、かつ「内部」すなわち日本の国内において「国民団結」を実現するように方向づけていくということである。ここでは「外部」と「内部」が自明のものとなっているが、「西洋事情」においてはそうではない。たとえば「新聞紙」の部分を見ても、新聞の目的・意義として「外部」に向けて「国民精神を発揚する」ことを挙げてはいない。もちろん、福沢諭吉が「外部」すなわち「西洋」を意識していなかったということではない。たとえば「通俗国権論」の「第二章 国権を重んずること」では、「此国風を守るも此国風を変ずるも、今日これを変じて明日又これを改るも、自由自在勝手次第にして、聊も他人の差図す可き所に非ず。之を一国の権と云ふ。若しも他より之を犯して我国の邪魔をする者あれば、之を国権を犯すの無礼と云ふ。無礼者は之を打払て可なり。遠慮に及ばざることなり。」

というように、「国」の「外部」にある「他国」が「国権を犯す」可能性のあるものとして意識されている。にもかかわらず「西洋事情」において「外部」としての「西洋」が前提になっていないのは、そもその成り立ちとしてこれが「翻訳」（「西洋事情 卷之一 小引」）であるということが関係しているのかもしれない。もともと「西洋」の立場で書かれているものを「翻訳」している以上、「外部」として「西洋」が意識されていなくてもおかしくはないということである。

しかし、あらためて陸羯南の言説と比較した時に、この「翻訳」ということが両者の間に大きなずれを生んでいるのが見えてくる。福沢諭吉たちが「翻訳」を行う上で問題になっていたのは、「外部」にはあつて、自分たちの身近にはないものをどのように扱うかということだった。「西洋事情」を初めとする「西洋」紹介の仕事において行われていたのは、それまでに使われていた語彙を流用したり新たな言葉を作るなりして「西洋」にあるものを「日本」の中にする事だった。つまり、彼らにとって前提にできなかったのは「外部」ではなく、「外部」に対応する「内部」であり、またその中にある「国風」や「国権」だったのである。彼らがしなければならぬこととは「翻訳」を通して「内部」、すなわち「日本」を新たに作り出すことだったのである。⁷⁾

それに対して陸羯南（や同時期に表現を始めた人々）にとってはそのような「翻訳」の必要は既に無かった。「外部」と対応し、かつ普遍的なものや価値（たとえば「新聞紙」、たとえばジャーナリズム）を「外部」と共有している「内部」が、自ら「翻訳」を創造

Ⅱ 想像するまでもなく自明の前提となっていた。その点で、彼(ら)は福沢諭吉たちと違う位置、現在の人間と変わらない位置で思考・表現していたと考えることができる。

さて、ここまで一八八〇年代から現在まで続いている状況について考察する中で、場所・時間を超えて共通する価値・本質や理想、つまり普遍的と見なされているものが、制度が自明化する上で大きな役割を持つということにふれてきた。次節・次々節ではそれらの「普遍」的な価値について整理しておこう。

三 「世界」における「日本」

以前、拙論「どのように文化の固有性は保証されていくか——「自然」というイデオロギー——」⁸において、日本の文化が固有の価値を持つということが、近代初期の日本の様々な言説の中で、どのように自明の前提になっていったのかを論じたが、その時には「文化」の「普遍性」が自明になっていく過程について論じることができなかった。

酒井直樹が既に指摘しているように、「日本のユニークさと同一性は、西洋という普遍的場に突出した特殊な対象というかぎりでのみ与えられるのであり、西洋の普遍主義に統合されるかぎりでは、日本はひとつの特殊性としての自己同一性を獲得する」ということがまず言える。⁹「固有」の存在であることが主張されているものは、実際はそれだけが単独で価値を持つことはなく「普遍」性を持つ価値とつながることによって価値を持つことができる。たとえば「文化」と

いう概念が「普遍」のものとして価値づけられていなければ、「日本文化」が価値を持つことはない。つまり「固有」性を主張するものは、自らが他にはない特別なものであることを訴えながら、同時に自らがどこにでもあるものの一部分をなしていることを前提として求めているわけである。「固有」のものは常に「普遍」のものとして結びつくことを必要としている。

近代初期の日本において「普遍」性を持った価値は「西洋」¹⁰、すなわちヨーロッパとアメリカ合衆国から導入された。今述べたように、「文化」というカテゴリーを初めとして「政治」「経済」「国家」「国民」「芸術」「文学」¹¹といった、本来ヨーロッパ・アメリカのローカルなカテゴリー・価値観が「普遍」的なものとして導入された。¹²ごく限られた地域で生じたカテゴリー・価値観が「普遍」的な、あらゆる場所で通用するものと見なされるようになったのは、これも「西洋」で作りに出された「進歩」を軸とする「世界」の分節化の仕方と関係している。「世界」の中で最も「進歩」した地域である「西洋」で自明の前提となっているこれらのカテゴリー・価値観は、他の未だ「進歩」の十分ではない地域においても共有されるべきであり、あらゆる場所で通用するものである、という過剰な意味づけを与えられたのである。

前節で名前を挙げた福沢諭吉などの近代初期の啓蒙家と呼ばれている人々は、「世界」や「西洋」についての知識を紹介する様々な著書の中で、「西洋」こそが最も「進歩」し「開化」しているということを繰り返して語っている。福沢諭吉の言葉を引けば、「世界第一学問の世話行届き、人情おとなしくして兵力強く、礼儀正しくし

て国富み、天然の産物は少けれども人の工夫にて物を造り、陸には蒸気車を用ひ海には蒸気船に乗り、何事も便利を尽し文武ともに盛なるは、欧羅巴と亜米利加とに限る」ということになる。そして、その最も「進歩」し「開化」した「西洋」に近づくことが、日本という「国家」、日本人という「国民」に求められたことだった。

もっともその「世界」観は、自然の境界に沿っているように見えながら実は政治的に区別された五つの「洲」という地域の分類や、それぞれの「洲」で生きる「人種」の違い・「智愚」の違いに関連づけた「渾沌」「野蛮」「未開又は半開」「文明開化」という階層を基準とした差別を含んでいる。この差別的な「世界」観と、「西洋」で生み出されたものが「世界」すべてに広まらねばならないという発想とは本来対立したものである。なぜなら、前者においては生来の「智愚」の差により、どのようにしても「文明開化」に行き着くことのできない地域・人々がいるのを当然のこととして差別的に表象してしまう可能性が常にあるからだ。ただ、ひとまず日本に関して言えば、「半開・未開」の状況から「文明開化」に移行するために、様々な有形・無形な制度および制度的な思考を取り入れることで、「西洋」で生み出された概念・価値観を共有することが求められていた。「進歩」とは「未開又は半開」と呼ばれている状態から、「文明開化」と呼ばれている状態へと変化することであり、それ以外の変化の可能性は全く考慮されていない。言い換えれば「文明開化」の状態を支えていた本節の冒頭にあげた様々な概念、すなわち「普遍」的なものとの結びつきを求めることで、「西洋」から導入された制度に思考を限定されることになってしまったわけである。

さらに言えば、「固有」「特殊」とそれに対する「一般」「普遍」というカテゴリー・価値観もまた同じく「西洋」で生まれた、他の地域には元々無いローカルなものであり、これらの言葉を自明のものとして使っているのは、それらが持っている価値づけ・政治性を避けることはできない。近代初期以来の日本の言説を相対化するためには、まわりくどい言い方になるのを恐れずに問いを立て直す必要がある。

四 ある「共犯」関係

あらゆるもの（こと）にあてはまる性質と、限られたもの（こと）にしかあてはまらない性質の間にある境界線はどのように引かれるのだろうか。

あらためて近代初期、十九世紀後半の日本の状況をまとめると、ここでは、日本という国家、日本人という国民または民族、日本人が担っている文化について、日本列島以外の地域に存在している国家・国民・民族・文化と共通する性質を持ったものとして語りつつ、同時に共通しない性質を持っているものとして語る、という両面作戦が行われていた。当時世界でもっとも「進歩」していると考えられていた「西洋」と共通するものを「日本」が持っているのであれば、いつか日本という国家、日本人という国民、日本の文化は「西洋」のそれと同じところにまで行けることになる。ただ、もし「日本」「日本人」「日本文化」に、例えば「イギリス」「イギリス人」「イギリス文化」と区別できるような特別な性質がないの

であれば、より優れたものの中に取りこまれてしまってもかまわない、いや取りこまれてしまった方がいいということになりかねない。しかし、「日本」「日本人」「日本文化」に他の国家・国民（民族）・文化とは共通しない性質があるのであれば、それらのカテゴリーは失われてはならない、守らねばならないものということになる。このような両面作戦は、現在も続いており、実際に「日本」「日本人」「日本文化」が失われてしまうという危機感が薄れてしまっていることもあり、その中に存在する矛盾・無理が見えにくくなってしまっている。

矛盾・無理というのは、共通する性質について語るにせよ、共通しない性質について語るにせよ、扱うもの（こと）は同じだということからまず生じてくる。つまり、一つのもの（こと）から、一方では他の地域・国家にあるもの（こと）と共通している点を取りだし、同時に他の地域・国家にない点を取り出さなくてはならないわけである。

もちろん、扱うもの（こと）を変えて、あるもの（こと）を取り上げた時には共通する性質について語り、他のもの（こと）を取り上げた場合は共通しない性質について語れば、この矛盾・無理にはつきあたらぬ。しかし、今度はそれらの複数のもの（こと）がどうして同じ一つの「日本」「日本人」「日本文化」として共通するものを持つと考えることができるのか、という問題が出てきてしまう¹⁵。そこで、通常¹⁵の感覚を超えたところにある本質の存在が要請され、様々な「日本」の、「日本人」の、「日本文化」の本質を語るものが出て来ることになる。

この節の冒頭で立てた問いに戻ると、あらゆるもの（こと）にあてはまる性質と、限られたもの（こと）にしかあてはまらない性質の間にある境界線は、それが必要とされる時に必要に応じて引かれるものである。つまり、そこには根拠というものはない。消極的な答え？ になってしまいが、あの問いに積極的な答えを与えるのは本質を前提にしてのみ可能であり、本論はそういう立場には立たない。

以上のような認識に立ちながら、この後であらためて論じていくのは、明治初期においてそういう矛盾・無理を抱えこみつつ、どのように「日本」「日本人」「日本文化」が他と共通しない性質を持っているものとして語られてきたかということである。ただ、前々節で述べたように、「西洋」に関する知識・情報を最も早い時期に受けとめることになった世代には、その矛盾・無理が見えてはいない。ジャーナリズム・教育・研究といった分野で現在の基礎となり、現在に続いている制度は「内部」の不在という葛藤を見失ったところで創始されている。

そして、「固有」なもの（こと）の価値づけやその存続を求める主張は、新たに導入された「普遍」的な（しかし実はローカルな）様々な概念・カテゴリーやそれらを網の目のように結びつけている知の大系に接続することによって可能になっている。だから、一見対立するかのように見える、内側を向いた「固有」「特殊」なものへの視線（たとえば「国粋主義」）と、外側に向いた「一般」「普遍」なものへの視線（たとえば「国際主義」）は、同じ「固有」／「普遍」という二項対立を前提にしている以上、全く対立などしていかないことになる。それをたとえば酒井直樹のように「普遍主義と

特殊主義」の「共犯性」と呼ぶこともできるかもしれないが、実際に「共犯」しているのは主義・立場ではなく、仮想された「固有」なもの（こと）と「普遍」的なもの（こと）なのである。「普遍主義と特殊主義」は「共犯」しているというよりも、元々前提を共有し初めから対立などしてはいない。

この「共犯」関係によって、「普遍」のもの（こと）と「固有」のもの（こと）はそれぞれに価値のあるもの（こと）として流通するようになった。本論は、百年以上前の近代初期の言説を扱いながら、現在も様々な分野で続いている「普遍」的なものへと結びつくことを求める思考・指向への批判を目指している。

五 「日本」と「日本人」の位置

あらためて陸羯南に目を向けてみよう。陸羯南は、これから扱っていく他の言説の書き手たちと共に、近代初期のジャーナリスト・教育者・研究者の一人として、「西洋」の価値観を「普遍」的な価値観として身につけ、かつそれを自明の前提として広めるのに大きな役割を果たした。さらに、「世界」の中に一つの位置・地位を占める日本という「国家」を作り出さなければならぬという啓蒙家たちの認識が、日本に予め「国家」として「世界」の中に存在するに足る重要な意義・理由があることを主張する「国民論派」の発想へとずれていっているのが見て取れる。

世界と国民との関係は猶ほ国家と個人との関係に同じ。個人と云

へる思想が国家と相容るゝに難からざるか如く、国民的精神は世界即ち博愛的感情と固より両立するに余りあり。個人が国家に対して竭すべきの義務あるが如く、国民と云へる高等の団体も亦た世界に対して負ふべきの任務あり。世界の文明は猶ほ社会の文明の如く、各種能力の協合及び各種勢力の競争に因りて以て其の発達を致すものたるや疑なし。国民天賦の任務は世界の文明に力を致すに在りとすれば、此の任務を竭さんが為に国民たるもの其の固有の勢力と其の特有の能力とを勉めて保存し及び「しめ」発達せざるべからず。¹¹⁾

「国家」は孤立して存在しているのではなく、「世界」の中で負うべき「義務」「任務」を持ち、それぞれの「国家」が「義務」「任務」を果たす事で「世界の文明」は「発達」していく。この認識は「個人」と「国家」の関係とのアナロジーによって語られているが、これは同時にある「国家」に属する「個人」、すなわち「国民」が「国家」に対して「義務」を持つ、という当時としては新しい認識を広めてもいる。比喻されるものだけではなく、比喻するものもまた未だ自明ではなく、比喻し比喻される中で両方が自明のものとして定着していく、ということが日本の近代初期にはよく見られるが、この「世界」―「国家」、「国家」―「個人」に関する言説もその一つである。

現在も継続しているこの「世界」に対する「国家」の任務という認識は、「世界」の中で「日本」が特別の位置・地位を占めていることを主張し、その位置・地位のゆえに「国家」として存在し続け

るのを保証することを目指しているが、指摘しておかねばならないのは、ここでいう「世界」や「国家」が「普遍」なもののように語られながら、実はごく限られた地域・階層だけを表している、というのである。「文明」とは前々節でも述べたとおりヨーロッパとアメリカ合衆国で発生し（もちろんそれは他の地域との関連の中で生じたものであり、「固有」のものであるとは限らない）、この時期に他の地域にも広がり始めたローカルな思考の制度のことであり、「世界」とは実際には「西洋」のことだけを指している。それぞれの「国家」の「任務」を承認し、その成果を認めるものとして期待されているのは「西洋」なのである。

陸羯南よりも少し若い三宅雪嶺（一八六〇～一九四五）の「真善美日本人」には具体的な「任務」の内容も含めてそのことがもつと明らかに語られている。

国家を成す者多し、彼れ皆各々其特能を尽して其の特色を秀絶せしむるの任務を負て而して立てり。今や欧米諸国の勢力強盛にして、向ふ所前なく、日月に波及して殆んど将さに寰宇を挙げて氾濫の中に没せんとす、没す、則ち其の旧の特色を泯滅して、其の自らの特能を伸ぶるあるのみ。是れ所謂真を極め、善を極め、美を極むる所以に於て、果して損傷する所なしとせんか。自然が冥々裏に其の不測の勢力を応用するや、亜細亞諸国敗亡相踵ぐの際に在て、絶海の東、叢爾たる島国猶ほ屹然として独立の日本帝国と称するを得る、是れ故無くして然るべからず意ふに将さに大に其の特色を用ゐらるゝあらんとする乎、日本人が大に其の特能を

伸べて、白人の欠陥を補ひ、真極り、善極り、美極る円満幸福の世界に進むべき一大任務を負担せるや疑ふべからざるなり

「日本人」が「特能」を伸ばし發揮することで、「白人の欠陥を補」っていかねばならないという表現は、「欧米諸国」を最も「進歩」した地域であると認めてのものであるが、それだけではなく「欧米」と「日本」との間に「文明開化」と「未開又は半開」という決定的な差を見出していないということでもある。この認識は、たとえば彼らがナシヨナリストである、ということでも説明できることではない。福沢諭吉たちの語っていた「西洋」の優位性はここでふまえられている。先程の引用の「白人の欠陥を補ひ」という言葉にしても、「白人」が占める役割が大きいことを前提としているし、この後の「日本人の任務」という章では「欧米人の優等人種にして我の輒く企及し難きを危まざるは尠からん」という言葉も見られる。しかし、ここではそれを相対化するために、「世界」や「人類」という概念が導入されている。「西洋」や「東洋」を含みこむ大きな概念によつて、二つのカテゴリーはどちらも全体のために奉仕することを求められ、その間にある差異は解消される。

さらに「日本人の能力」の章では、「欧米人」が明らかに優れている「体格」が「開化」に関係ないこと、重要な「智力」について「日本人」が「欧米人」に劣っていないことが、「西洋」の歴史の知識に基づいて語られていく。また、伊能忠敬・曲亭馬琴・紫式部といった「日本人」だけではなく、他の「蒙古人種」の業績までが、その「人種」全体の中で「最高の地に居るを得ざるも、第二流より

下る者」ではない。「日本人」の「智力」を証し立てるものとして取り入れられている。ただ、ここで問題にしたいのはそういう論理の飛躍ではなく、「日本」や「東洋」について語りながら、その論拠にしているのが「世界」の歴史や「人種」といった「西洋」から導入された知識や概念・カテゴリーだということである。また、他の個所では「黄河近傍」「亜刺比亞」「印度埃及」における生産・生活の変化を「開化」と呼ばれる概念ですべて同じものとして語っているが、これによって地域による変化の仕方の違いを消してしまっていることになる。そういう「文明」「開化」を「普遍」のものにとらえる発想の元に、「近世歐洲の開化を以てアリアン人種能力に出づると為すも、蒙古種は猶実蹟に於て彼れと頡抗するを得るなり」という宣言が謳われていく。

その「蒙古種」という「人種」の一員として、「世界」「人類」のために「日本人」が果たす「円満幸福の世界に進むべき一大任務」の筆頭に挙げられているのは、「東洋政治史なり、東洋商業史なり、東洋工芸史なり、東洋哲学史なり、東洋文学史なり、若くは地誌、風俗誌、動植物誌、又若くは豪傑の事、名家の事、大変動の事、斬新なる筆鋒を以て之を叙述し之を描写し之を批判して討究」することである。この「任務」の前提になっているのは、先程の引用にあった、「亜細亞諸国」の中で唯一「猶ほ屹然として独立の日本帝国と称」している、という認識である。歴史的な経緯はあるものの、多分に偶然によって生まれたこの状況を、「日本人」の「思想精緻、悟性明敏」な性質と結びつけ、「亜細亞」における「日本」の特別な位置・地位を主張しているわけである。

そして、その「任務」、「未だ世に知られざる東洋の事物を研究して、新材料を学术界に供給」する役割を果たすことで、「日本人」は「學術世界に一頭地を放出」することが可能になる、とも言っている。ここでいう「世」や「学术界」はあたかも「普遍」的な「學術」の世界のことを指向しているように見える。ここでは、「普遍」的な「人類」の知の進歩が求められ、かつそれを担う「學術」の世界も地域を超えて「世界」に広がっている、ということは現在であれば一応自明の前提になっているわけだが、ここで語られている「東洋の事物」を「未だ」知らない「世」とは「西洋」、すなわちヨーロッパとアメリカ合衆国のことである。

この時点で「学术界」と呼べるものが存在しているのは「學術」という制度が作り出された「西洋」だけである。もちろん、様々な対象について学び、調べ、考えている人々やその人々が集まった組織は他の地域、たとえば日本にもあったわけであるが、ここでいう「學術」とは本論でいうアカデミズム、大学・学会・研究誌、さらに研究誌を舞台にした議論など有形・無形の制度から構成された地域的・歴史的に限定された特殊な制度である。それは、「西洋」で整えられたジャーナリズム・教育などを構成する他の諸制度と同様に近代になってそれ以外の地域に広がっていき、「普遍」的な価値を持つものとして捏造されていった。

その「普遍」的な知を「進歩」させていき、また「世界」とつながっている「学术界」は、日本においても概念・カテゴリーとして、また制度として確立・整備されていく。最後の節では、「日本文学」と「日本美術」の研究について見ていこう。

六 「日本」の「学問」

一八八六（明治十九）年に「東洋学会」という名前の学会、つまり「学術」のための組織が創設されており、その機関誌『東洋学会雑誌』で三上参次（一八六五〜一九三九）が「泰西」における「東洋学会」の活動について解説している。¹⁹

東洋の人にして如此其固有の学問を蔑視するものあるに泰西の人として却てこれを尊敬するものあるはまた奇ならずや泰西の人々か哲学。科学。法学。など、同等に其所謂古文学則ち希臘羅馬の学問を研究するのみならず東洋の学問事物をも精討検覈するに熱心なる我々東洋人をも愧死せしむるに足るものあり其是を研究する決して好事の意に出るに非ず全く其実際の利益を看破したるに基けること言を待たず是を以て余か本題に入り東洋学問の価値を計量するに当り先づ泰西の人か如何ばかり東洋の学問を尊重せるかを観察せんとするなり

この「東洋学問の価値」において「泰西」における「東洋」についての「学問」の状況を紹介しているのは、「東洋学問」の必要性・根拠を「進歩」した「泰西」に求めていることである。さらに、ここでは「日本」の国内に向けて「東洋学問」の必要性を主張しつつ、日本における「東洋」についての「学問」を「世界」の「学術」と接続させることをも目指している。いくら「東洋」や「日本」につ

いての研究が「内部」で行われたとしても、それが「外部」とつながっていないければ「普遍」的な価値は獲得できない。もっとも、その場合必要なのは実際に「泰西」の研究・学会で評価を受けることよりも、自明化された「内部」において「普遍」的な価値と関係している（はずの）制度（学会や大学）とつながることなのである。

三上参次は、一八九〇（明治二三）年に日本で最初の「日本文学」の通史である『日本文学史』（金港堂）を高津鯉三郎（一八六四〜一九二一）との共著で出版するわけであるが、その前年発表した「日本文学史緒論」を「泰西史学の講究法の開けてより、東洋に真史なしと云ふ語は、屢、聞く所なるが、如何にも因果の理法を明にせし史書は、殆、無きが如し」という一文で始めている。ここでは、元々「泰西」で生まれた「史学」がその基本原理である「因果の理法」も合わせて、「日本」においても実現されなくてはならない「普遍的なものとして価値づけられている。本論の冒頭に述べたように、そのような「普遍的な価値を持ったものを共有することこそが「文明開化」の状態にあることを証し立てる要素としてとらえられているのである。特に「近頃所謂真史と称すべき者も、追々世に出づる様なれど、文学史の方は一向に進まず」という状況で、「日本文学史」を書くことは「史学」だけではなく *literature* を翻訳した概念である「文学」という「普遍的なカテゴリー」に、「日本」でそれまで書かれてきたもの（たとえば「徳川氏の世」における「稗史、小説、俳諧、狂歌、浄瑠璃文、狂言文、川柳、狂句等」）をつなげることになる。そこで獲得・捏造された「普遍」性は、「日本文学」それ自体だけではなく、様々な区分において「日本文学」を作り、

また論じ、「日本文学史」を記述するものまでも「普遍」的な価値に近づくことができる、というフィクションを生み出してきた。このフィクションなしには、「日本文学」というジャンルが現在まで続くということはなかっただろう。そして、それは「日本文学」に限ったことではない。

およそ日本の芸術理想の歴史なるものは、その芸術がいわば宝石のようにはめこまれていた多種多様な環境と、たがいに相関的な種々の社会現象とに、西洋がかくも無知でいるかぎりは、ほとんど企て及ばざるものである。

岡倉天心（一八六二～一九一三）の「東洋の理想」の一節であるが、三宅雪嶺の「真善美日本人」と同様ここでも「日本の芸術理想の歴史 history of Japanese art-ideals」が記述されるにあたって、「日本」について「無知 unaware」な「西洋 the Western world」（だけが意識されている）。

「真善美日本人」の中では、「東洋の事蹟を研究する」ために「帝国博物館」の充実が必要であり、「東洋の材料を蒐集」するために「亜細亜大陸に学術探征隊を派遣する」ことが主張されていた。この主張が実現されたことは、「帝国博物館」の後進である現在の東京国立博物館を初めとする日本の博物館・美術館の「東洋」関連のコレクションを見ればわかるのであるが、それらの施設の基礎を作り、また自ら清（一八九三年）、インド（一九〇一年）へと「学術」調査に出かけているのが、岡倉天心なのである。岡倉天心が「日本

美術史」^{*24}「泰東工藝史」^{*25}を研究する上で、前提にしていたのもやはり「美術」「工芸」という輸入されたカテゴリーであった。当然、彼が「日本」や「東洋」の「美術」について語る時にも、「西洋」の「学術界」に向けて言葉を発することになる。もちろん「東洋の理想」が元々英語で書かれ、イギリスで刊行されているということもあるが、さらにその中で読者として想定されているのは、「未だ」「東洋」を「知ら」ない「西洋」なのである。

「東洋の理想」の叙述の多くは「日本美術」の歴史を語ることに費やされているが、冒頭の「一理想の範囲」(THE RANGE OF IDEALS) には「日本美術」の位置・地位が定められている。

アジアは一つである。ヒマラヤ山脈は、二つの強大な文明、すなわち、孔子の共同社会主義をもつ中国文明と、ヴェーダの個人主義をもつインド文明とを、ただ強調するためのみ分っている。しかし、この雪をいたたく障壁さえも、究極普遍的なるものを求める愛の広いひろがりをも、一瞬たりとも断ち切ることはできないのである。そして、この愛こそは、すべてのアジア民族に共通の思想的遺産であり、かれらをして世界のすべての大宗教を生み出すことを得させ、また、特殊に留意し、人生の目的ではなくして手段をさがし出すことを好む地中海やバルト海沿岸の諸民族からかれらを区別するところのものである。(略)

けだし、もしアジアが一つであるとするならば、アジアの諸民族が力強い単一の組織をなしているということもまた真である。(略)

しかしながら、この複雑の中なる統一をとくに明白に実現することは、日本の偉大なる特権であった。この民族のインド・韃靼的な血は、それ自身に於て、この民族を、これら二つの源泉から汲み取り、かくしてアジアの意識の全体を映すものとなるにふさわしいものとするところの遺伝であった。万世一系の天皇をいただくという比類なき祝福、征服されたことのない民族の誇らかな自恃、膨張発展を犠牲として祖先伝来の觀念と本能とを守った島国的孤立などが、日本を、アジアの思想と文化を託す真の貯蔵庫たらしめた。王朝の覆滅、韃靼騎兵の侵入、激昂した暴民の殺戮蹂躪——これらすべてのものが何回となく全土を襲い、中国には、その文献と廢墟のほかに、唐代帝王たちの栄華や、宋代社会の典雅を偲ぶべき何らの標識も残されていないのである。(略)

かくのごとくにして、日本はアジア文明の博物館になっている。いや博物館以上のものである。

「アジアは一つである Asia is one」「日本はアジア文明の博物館 Japan is a museum of Asiatic civilisation」という岡倉天心の名文句として耳慣れた言葉が出て来る個所であるが、この記述を成り立たせているのは、「西洋」的・「文明」的な概念・カテゴリーの積み重ねである。

最初の段落では、「究極普遍的なるもの the Ultimate and Universal」を求める指向を「アジア民族に共通の思想的遺伝 the common thought-inheritance of every Asiatic race」として語り出している。そして、その指向を差別化・卓越化するために、比較される他の地域

として「地中海やバルト海沿岸の諸民族 the Mediterranean and the Baltic」、すなわち「西洋」の「文明」の起源と見なされていたものを持ち出している。これはやはり「西洋」が「日本」に対して「學術」において優位に立っている、という現状認識と結びついている。ただ、ここで「普遍」性を求めることを「アジア民族」の指向として語っているのは、前節の三宅雪嶺と同じく潜在的な知的能力に関して「日本人」は「西洋」の人間に劣っていない、ということを主張するためである。ただ、三宅雪嶺が「悲い哉、我が日本人は理義究明の能力、未だ遂に白人に譲る者ならざるに、彼れは猶ほ遮へらるゝ所ありて、充分に其の能力を展ぶること能ざるなり」と語っているのに比べると、より強い主張になっており、これは発表された時期や想定している読者の違いから来ているのだろう。

もつとも、ここで「アジア民族」の傾向を持ち出しているのは「日本」を語るための前提にすぎない。「真善美日本人」と同様にここでも「日本」は「アジア」の中で「特権 privilege」的な地位を与えられている。引用の二段落目では冒頭の「アジアは一つである」という最初の宣言を裏切るように、「アジア」の他の地域と「日本」を差別する「固有」性・「特殊」性が語られていく。「万世一系 unbroken sovereignty」「征服されたことのない民族 unconquered race」「島国的孤立 insular isolation」といった「民族」や「国家」などの近代的カテゴリーを前提とした歴史が語られ、「アジアの思想と文化を託す真の貯蔵庫 the real repository of the trust of Asiatic thought and culture」という本命の宣言が謳われているが、冒頭で述べたように、そもそも「アジア」というカテゴリーを自明の前提にするこ

と自体が政治である。「東洋の理想」は「アジア」の多様性・「複雑 complexity」を語りつつ、アジアの「単一 single」性・「統一 unity」を前面に出し、また「アジア」の「単一」性を語りつつ、「日本」の固有性・「特権」を前面に出す。近代初期の啓蒙家たち以来の両面作戦がここには受け継がれている。ただし、そこでは未だ存在していないかもしれない「内部」としての「日本」は、既に明らかに存在しているものとして語られ、また「西洋」だけではなく「アジア」を含めた「外部」と何の抵抗もなくつながってしまったている。

この無抵抗さが現在の「日本」を語る状況と共通しているのは今まで述べてきたとおりである。

以上のような状況は「日本」以外の地域カテゴリーを問題にしたり、「文学」「美術」や「文化」といったいわゆる人文系以外の様々な概念・カテゴリーを取り上げるところでも成立していたはずである。それらのフイクションは現在も生み出され続け、受け継がれ続けている。それは思考・表現に対して高い生産性を持ちつつ、思考・表現の可能性を狭めている。

もちろん、取り上げられる地域、扱われるジャンル、そしてそれらを扱っている分野・区分によって、様々な差異は見られるだろう。本論で論じてきた言説の間にも書いた人間ごとの、またその人間が属している区分ごとの差異は当然あるはずだ。その点も別の機会に論じなければならないだろう。

ただ、ここではその差異の一つ一つを取り上げることよりも、様々なジャンル・区分（における言説）を可能にしている前提の方に

重点を置いている。それは、初めに述べたように一八八〇年代と現在の差異をあえて問題にしなかったのと同様である。差異を無視したこと、その前提自体が避けられない「普遍」的なものであるかのように語っている個所もあるかもしれないが、もちろん決してそういうことではない。「普遍」のものと「固有」のものとの関係は、ある時期にある地域から始まり、そしていつかはそれが絶対的なものではないことが明らかになっていくはずである。本論はそれを目指す試みの一つである。

引用に際して、旧漢字は新漢字にあらためた。

- *1 『日本』一八九〇年七月二〇日〜九月二日。引用は『陸羯南全集第一巻』（みすず書房、一九六八年）による。
- *2 『日本』七月二十五日掲載分。
- *3 『日本』七月二十二日掲載分。
- *4 初編一八六六年、外編一八六七年、二篇一八七〇年。引用は『福沢諭吉全集第一巻』（岩波書店、一九五八年）による。
- *5 陸羯南「〔創刊の辞〕」『日本』第一号、一八八九年二月十一日。引用は『陸羯南全集第二巻』（みすず書房、一九六九年）による。
- *6 慶応義塾出版社、一八七八年。引用は『福沢諭吉全集第四巻』（岩波書店、一九五九年）による。
- *7 ここでの「翻訳」という語は、「西洋事情」からの引用であると同時に酒井直樹『日本思想という問題 翻訳と主体』（岩波書店、一九七七年）をふまえて使用している。
- *8 『国語国文研究』百号、一九九五年七月。
- *9 「近代の批判中絶した投企」『現代思想』一九九四年一月号。引用は『死産される日本語・日本人 「日本」の歴史―地政的配置』（新曜社、一九九六年五月）による。ただし、一八八〇年代の状況から考えると、酒井直樹のように「日本は西洋によって認知されたときにはじめて自己を与えられ、自己の同一性に目覚める」という言い方しているのは「西洋」を実体的にとらえすぎていることになる。「自己の同一性」の「目覚め」に必要なのは「普遍」性を担うべく仮想・想定された「西洋」だけで十分である。それは現在においても同じことだろう。
- *10 本論の中で「西洋」と表記する時には、地域としてのヨーロッパやアメリカ合衆国だけではなく、近代初期の日本において過剰に意味づけられ、価値づけられたものを指している。それは、自らが「西洋」として振る舞うと同時に、「西洋」以外の地域においてイメージ・規範として機能している。
- *11 これらのカテゴリーは本来欧米の語として導入されたものであり、ここで用いているのはそれに対してあてられた翻訳語である。
- *12 これは「文明」を「西洋」「欧米」に「特殊」「固有」な「文化」として位置づけているということではない。その点で、たとえば「近代科学」は「西洋というきわめて特定の思想・文化圏において、西洋的な思想・文化を基盤として」作り出されたと言語の渡辺正雄『文化としての近代科学 歴史的・学際的視点から』（丸善、一九九一年。引用は講談社学術文庫（二〇〇〇年）による）とは立場を異にしている。「文明」が持っているカテゴリー・価値観は他の地域・時代にも要素として見出せるし、逆に「西洋」として語られている地域の

中でも様々な差異が見出せる。ここでローカルで歴史的というのは、「文明」およびそこにいたる「進歩」が「普遍的」な価値とし見なされていることを批判し、たまたまある地域で生じたものだ、ということ強調するためである。

*13 福沢諭吉「西洋旅案内」尚古堂、一八六七（慶応三）年。引用は『福沢諭吉全集第二卷』（岩波書店、一九五九年）による。

*14 福沢諭吉「世界国尽」一八六九（明治二）年。引用は『福沢諭吉全集第二卷』による。

*15 同じカテゴリーに属すると見なされているもの（こと）の間にある差異が、別々のカテゴリーに属すると見なされているもの（こと）同士の間にある差異よりも小さいということは論理的には定められない。この点については、「どのように文化の固有性は保証されていくか」を参照していただきたい。

*16 「近代の批判：中絶した投企」（前出）。

*17 「近時政論考」（前出）。『日本』一八九〇年九月一日掲載分。

*18 政教社、一八九一（明治二四）年三月。引用は明治文学全集33『三宅雪嶺集』（筑摩書房、一九六七年）による。

*19 「東洋学問の価値」『東洋学会雑誌』第一編、一八八九（明治二二）年十月。なお署名は「三上三次」となっている。

*20 『日本文学』第十号、一八八九（明治二二）年五月。この論は、基本的に『日本文学史』の「総論 第一章 文学史とは何ぞ」と共通する記述が多いのだが、『日本文学史』には引用と同じ部分はない。

*21 もちろん、「文学」という語は近代以前からあったのだが、ここでは literature という語が導入されることによる「文学」カテゴリーの転換のことをふまえている。なお、「日本文学緒論」には「先年、史学協会雑誌にて、日本文学史と題したる文章を見たれど、これは我輩の所謂文学史とは、甚しく観察の点の違へるものなり」という記述があり、三上参次たちは自分たちの語る「文学」を転換以前のものと差別化しようとしている。

*22 原題は“The Ideals of the East with Especial Reference to the Art of Japan”²⁶。一九〇三年二月にロンドンの John Murray Co. から出版された。引用は明治文学全集38『岡倉天心集』（筑摩書房、一九六八年）所収の富原芳彰訳による。

*23 英文の引用は“The Ideals of the East with Especial Reference to the Art of Japan” ICG Muse, Inc. New York 2000 による。

*24 岡倉天心が一八九〇年に東京美術学校で行なった講義の記録に付けられたタイトル（『岡倉天心集』の宮川寅雄による「解題」）

*25 岡倉天心が一九一〇年に東京帝国大学文科大学で行なった講義の記録に付けられたタイトル（『岡倉天心集』「解題」）。

*26 「偽悪醜日本人」政教社、一八九一（明治二四）年。引用は『三宅雪嶺集』による。